

2008年1～2月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
きらめきを風にひろげて银杏散る  
木枯しに吹き寄せられて来し茶房  
満開といふしずけさの冬桜  
火の色を変へ寒風に揺らぐ燭  
たぐひなき冬晴ビルを高くする

横浜 下島 緑  
山峡の小さき神の田蓮根掘る  
虫も葉も還る土なり冬耕す  
鴨の来て水面きらめく池となる  
雨すこし降って落葉の匂ひたつ  
七十路のこころ小春に解き放つ

藤沢 藤田 富子  
心地良き風に太りて竹の春  
太陽を遠巻にして翳雲  
秋の日の日毎に広く部屋を占め  
秋彼岸墓に雑草生ふままに  
赤とんぼ群れ飛ぶ空の青さかな

さいたま 宮崎 美智子  
アルプスを見渡す城址一葉落つ  
楷の実のつややかにあり孔子廟  
松手入れふくよかに立つ孔子像  
秋の蝶多彩な羽根をゆるく閉づ  
外灯へつるべ落しの灯の入りぬ

町田 小森 まさ彦  
高層のビルてっぺんの秋入日  
髪染めてエナメル履いて千歳飴  
行く秋の峡に瀬音と老夫婦  
末枯れゆく中の灯りや石路の花  
大仏に秋日傾く忌日かな

綾瀬 岡田 洋子  
門灯を早目にともす暮れの秋  
鶏頭の種はらみある深き巖  
花びらの緩く波打つ芙蓉かな  
一葉づつ桜紅葉の色深め  
银杏の風に落下のつづけざま

2008年3～4月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
てっぺんに光をあつめ楡芽吹く  
薄紙を取ればひひなの息づかい  
はくれんの百花に視線はじけたる  
濡れ残る光の中の初桜  
揺れさうに鳴りだしさうに花あしび

相模原 西澤 桃園  
串も焦げ木の芽田楽香ばしき  
遠き峰ほど青の濃き裾霞  
藪椿傘とし羅漢思案せる  
植木市繁盛なりし花まつり  
五分咲きの花に篠突く雨と風

横浜 下島 緑  
くるくると鳩啼く日向日脚伸ぶ  
早梅の一輪に人集まり来  
山裾の日向綴りて探梅行  
ふるさとに似て山道の梅薫る  
外つ国に住む娘に飾る雛かな

綾瀬 岡田 洋子  
ふっくらと炒られ香ばし年の豆  
春雨の明るうなりて止む気配  
ひと区切終へて耕人背を伸ばす  
椿落つ音またひとつある夕べ  
ふらこを孫の笑顔に揺らしやる

横浜 水出 節子  
抜け殻となりて芝生に蝉眠る  
アルカイツクスマイルの釈迦とはさやか  
日の暮を惜しみつつ掃く庭落葉  
受験子の目差熱く初詣  
鬼の居る場所知らぬまま豆を撒く

藤沢 藤田 富子  
風花や二人寄り添ふ傘の中  
寒空を見上げ出足のにぶりけり  
鈍色の海の色藍すでに春  
早春の江の島あたり手に  
こつこつと働きくれし針納む

さいたま 宮崎 美智子  
雪催ひ灯り引き寄せ続き読む  
友を待ついつしか春の雪のなか  
関東の最古の神楽見にゆかん  
臘梅を一抱えて庭師来る  
春の浜ハングライダー海上へ

町田 小森 まさ彦  
ランナーの春昼銀座駆け抜けて  
群青の色の薄れや春の空  
群青の濃淡返てを示す空  
薄氷を透ける魚に動きなし  
虫呼ばぬ臘梅の香の情けなく

2008年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
信号のかはり夏めく街うごく  
泥をぬぎ光る蜻蛉生まれたる  
やはらかき風ひそみゐる萩若葉  
種蒔きしよりがよへる土となる  
満月をあげて八十八夜冷

横浜 下島 緑  
大南風文明開化の丘を吹く  
思はざる高さに現れて皐月富士  
祝はれる児は背に眠り初幟  
山若葉氏神様を遠拝み  
はなみずき黄昏永き坂の町

藤沢 藤田 富子  
花の下名優の墓所おとなひぬ  
旬のものの盛沢山に花見膳  
ネオンの灯不景気風に朧なる  
春の海忽と現れ眩しかり  
一日を筭づくしの厨ごと

さいたま 宮崎 美智子  
花の雨人の声する句碑の山  
春寒や戦場ヶ原一望す  
いたづらの子を諫めたる遍路寺  
大道芸花見るほどに人寄るらず  
雲丹を焼く老いたる海女の寡黙なり

綾瀬 岡田 洋子  
うつかりと青木の花を見過せる  
寒鯉の水を濁してつと動く  
早梅の蕾の固さ日のほどく  
真青なる空に融け入る花辛夷  
咲き満ちて日に匂ひゐる朝桜

横浜 水出 節子  
花の下柔和な顔の弁財天  
故郷の桜恋しき日和かな  
桜咲き吾が町パステルカラーめく  
花冷の雨もまた良し花の町  
落ち込みてエイプリルフルと眩きぬ

町田 小森 まさ彦  
シャッターの開かぬ小路の蓬の芽  
点と消ゆ大型農機芋植うる  
行き戻りして二十町歩の種おろし  
南朝の栄枯盛衰花は葉に  
修験者の駆け抜く峰や風光る

2008年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
ゆるやかに風に染み入る鉢漣子  
ゆっくりと時間をきざむ里涼し  
これ以上まがりやうなきへぼ胡瓜  
どよめきを吐息にかへて花火果つ  
山が夜の色となりゆく法師蟬

横浜 下島 緑  
夕空に溶けて櫂の花の色  
梔子の香のひろがってゆく闇夜  
どくだみの名には似合はぬ白十字  
ころにも糊つけ干さむ梅雨晴れ間  
紫陽花の咲くてふ花を確かめむ

藤沢 藤田 富子  
はやり目でふ憂き目にかかり梅入り前  
紫外線気にして夏帽はなさざる  
軽鼻の子に人気集まる水辺かな  
ミニチュアのやうなで虫葉にすがる  
おぞましき事件多発や五月闇

さいたま 宮崎 美智子  
藍染の甚平届く父の日に  
黒揚羽手元へからむやうに来る  
たんぼぼの絮散らしゐるわれ無心  
子より来る新茶の礼状あたたかき  
河骨や灰暗き沼を明るうす

綾瀬 岡田 洋子  
無造作に萎えきし薔薇を切る園丁  
園に吹く風は七色花そうび  
雨粒の消えて海芋は無垢の白  
濃き紅に甘さ溜めゐるゆすらの実  
崩れ散る薔薇の花びら拾ふ子等

横浜 水出 節子  
きらきらと流れゆく水夏来る  
蠅叩きもてごきぶりを打ちにけり  
地に音をたてて実梅の落ちにけり  
紫陽花の匂ひなけれど色床し  
豆飯を炊く水加減心して

町田 小森 まさ彦  
鷺草の揺れの先なる汀子句碑  
蝦夷路の大葉の影の廃屋かな  
最北の鉄路表示も地霧の中  
海に浮く最北の富士夏の山  
長き日に蝦夷夏花の咲き乱る

2008年9～10月掲載分

- 相模原 西澤 桃園  
芒原狐の駈けて来るやうな  
オロフレや鬼女のいさうな芒原  
我が影の海坊主めく十三夜  
曼珠沙華女は情にもろきもの  
おもなみの実を勲章に山下る
- 習志野 大慈弥 爽子  
あふれつぐ音をひろげて水の秋  
風わたる色に真葛が原匂ふ  
青天へ匂ひをとばし稲を刈る  
出来秋の重さをかろく刈り上ぐる  
青空へカナリア秋を歌ひをり
- 横浜 下島 緑  
山棲みに朝夕の風秋すだれ  
街騒を逸れて水引草の径  
隣室に夫ある安堵秋の夜  
解かれゆく宇宙の神秘月今宵  
なほ惜しく忘れし扇おもひをり
- 藤沢 藤田 富子  
精を出す朝涼の間のひと仕事  
汗をかくこともよきかと逆らはず  
寝苦しき暑さに耐えて夜明待つ  
あちこちと寝場所移して熱帯夜  
思考力及ばぬ暑さいつまでか
- さいたま 宮崎 美智子  
赤とんぼ梅若塚へまた詣づ  
ゆっくりと殻を抜けたる羽化の蝉  
鈴虫のなかにひときは良き音色  
しゃっきりと祭衣装の娘が二人  
露時雨行き交ふ人のなき峠
- 綾瀬 岡田 洋子  
夕立過ぐ大地の匂ひかき立てて  
吊ればすぐ軒の風鈴音を奏づ  
雨粒を弾いてきらり青トマト  
路地の闇ねずみ花火が這い回る  
寝付くまで団扇の風と子守唄
- 町田 小森 まさ彦  
立山の闇の裾野の風の盆  
風の盆果て農耕民の色となる  
街路樹の真一文字に薄紅葉  
朝顔や恥もて生きることはなく  
突然に土手に現る狐花

2008年11～12月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子  
きらめきを風にひろげて銀杏散る  
木枯しに吹き寄せられて来し茶房  
満開といふしずけさの冬桜  
火の色を変へ寒風に揺らぐ燭  
たぐひなき冬晴ビルを高くする
- 横浜 下島 緑  
山峡の小さき神の田蓮根掘る  
虫も葉も還る土なり冬耕す  
鴨の来て水面きらめく池となる  
雨すこし降って落葉の匂ひたつ  
七十路のこころ小春に解き放つ
- 藤沢 藤田 富子  
心地良き風に太りて竹の春  
太陽を遠巻にして鯛雲  
秋の日の日毎に広く部屋を占め  
秋彼岸墓に雑草生ふまに  
赤とんぼ群れ飛ぶ空の青さかな
- さいたま 宮崎 美智子  
アルプスを見渡す城址一葉落つ  
楷の実のつややかにあり孔子廟  
松手入れふくよかに立つ孔子像  
秋の蝶多彩な羽根をゆるく閉づ  
外灯へつるべ落しの灯の入りぬ
- 町田 小森 まさ彦  
高層のビルてっぺんの秋入日  
髪染めてエナメル履いて千歳鉛  
行く秋の峽に瀬音と老夫婦  
末枯れゆく中の灯りや石菫の花  
大仏に秋日傾く忌日かな